

零歳児に、漢字が覚えられるのは

雄鎔君には会ったことがありませんが、庸介君や孝旨君には会っていますし、その御両親とも交際がありますから、よく知っているつもりです。確かに、庸介君も孝旨君も、雄鎔君と同じように、零歳のうちから漢字を覚えました。けれども、決して超人ではなく、当たり前の幼児です。雄鎔君も恐らく同じだろうと思います。

生後八か月という時期は、すでに述べましたように、母親が語りかける言葉を受け取って、その通りに自分でも言ってみようとし始める時期です。つまり、“かたこと”を言い始める時期です。

耳から入ってくる言葉を脳に納め、その通りに口から出すことは、幼児の受納能力や模倣能力が高いから出来るのであって、決してなまやさしいことではないのです。そのことは、私たちが外国語を学習する場合に、いやというほど痛感させられていることです。

言葉は、いくつもの異なった音声から成り立っていて、それは一定の順序で、一定の時間的な間隔をもって、次々に見せられ、発せられるはしから消えてしまいます。だから、その微妙な違いのある音声を即座

に識別しながら、次々とその全体を正しく受け取り、それを脳に記録するということは、よく考えてみれば、大変な仕事だということがわかると思います。

それに反し、漢字は、初めから一つのまとまりのある図形をしていて、しかも、記憶できるまで消えずに待っていてくれるのですから、覚えられないわけがないのです。すでに親の顔を覚え、人見知りするだけの識別力を持つ赤ちゃんの能力を以てすれば、漢字を識別することなど実に容易なことなのです。

今まで、零歳児に漢字が覚えられない、という先入観だけで、だれも漢字を教えなかったから、赤ちゃんは漢字を覚えなかっただけです。